OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	English as an International Language in Communities of Practice: Case studies of English use in Japanese international Christian churches
Author(s)	Yu, Simon
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70680
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名	（YU SIMON RON-OW）
論文題名	**English as an International Language in Communities of Practice: Case studies of English use in Japanese international Christian churches** （実践共同体における国際英語：日本の国際キリスト教教会における英語使用の事例研究）

論文内容の要旨

本研究の目的は、共同体における実践への参加や目標の共有が言語使用や言語に対する態度にどう影響するかを理解するために、日本の国際教会コミュニティにおける英語使用を分析することである。参加者の態度と実践は、「国際英語」(EIL) (English as an International Language) (Smith, 1981)の観点から評価される。国際英語の理念は、円滑な国際コミュニケーションに加えて非母語話者の平等とエンパワーメントを目指すとともに、母語話者の規範を相対化するものである。

まず第1章では、この研究のテーマと目的を紹介する。日本において国際化への意識が高まっている、また英語教育が拡大しているにもかかわらず、母語話者の規範は学校で引き続き教えられ、普遍的に受け入れられている。国際コミュニケーションのための「脱英米の英語」の必要性は、国際英語がさまざまな使用者の文化や価値観をよりよく表現する能力と同様に、世界での英語使用の現実に基づいて論じられている (Hino, 2014)。また、非母語としての英語使用をより深く理解し、受け入れることで、英語話者のエンパワーメントを可能にするとも考えられている。しかし、日本において国際コミュニケーション手段としての英語使用が必要となる状況は、特に教室外における実際の状況では限られており、その結果、英語使用者が彼らの態度や信念に影響を与える要因をどのように形成するかは依然として不明瞭である。本研究では、2つの国際教会を背景に、言語に対するメンバーの態度や信念を調査することで各コミュニティ内の英語使用を研究し、同時にそれらが経験や国際交流を通してどのように変化するかを分析する。

第2章は、先行研究に基づいた研究の理論的基礎と位置づけを概観する。本節では、「国際英語」とは何かという点に始まり、英語に対する観点について考察する。国際英語は、特に国際コミュニケーションの手段としての英語に基づいており、母語英語変種の本質的価値を相対化する。また、非英米的な独自の文化的価値観を表現できる革新的な用途に役立つ非母語英語変種の開発を肯定的に評価するものである。国際英語においてはさらに、非伝統的な英語の規範や使用者の目的に合致するための言語変化が歴史的な観点から議論されている。これに基づき、「国際英語」教育は非母語話者モデルと非母語話者の可視性の増加を主張し、母語話者ではない話し手の価値観とアイデンティティを尊重する。また英語変種の理解度は、当該の変種の受容における主な基準とされる。考察の枠組みとしては、「実践共同体」の概念を用いる。この枠組みは社会実践における言語使用の分析に適しており(Wenger, 1998)、コミュニティと外部との境界について考察することも可能となる。また、国際コミュニケーションにおける英語使用との関連性が特に深い。このように、本研究は現実の環境における英語使用者の実証的研究の必要性を満たすとともに、コンテクスト、関係、実践に関連する態度についての考察を深めるものである。

第3章では、この研究の研究方法を概説する。本研究の目的に基づき、言語使用に関連した関係、環境、組織の詳細な状況を把握するために、ここではエスノグラフィーのアプローチを取る。ケーススタディを採用することで研究における境界を明確にすると同時に現象を説明でき、また複数の事例を調査することで信頼性を備えた深い分析が得られる。データの収集は、広範な参与観察、会話、インタビューや、テキスト、レポート、記録の収集を通じて行い、データのコード化と分類に基づいた帰納的なデータ分析を実施している。

第4章および第5章では各ケーススタディの研究結果を示す。言語の実践と態度に関する結果を詳細に提示しており、特に英語の使用やコミュニティでの実践の状況を提示することに留意している。

第4章では、さまざまな教会活動における英語使用が組織的に普及していると同時に国際交流の場として頻繁に影響を受ける国際教会である教会Aの事例を取り上げる。この章は、教会での諸活動と国際宣教師とのパートナーシップという2つの主要な部分に分かれている。第1部では、礼拝、小グループ、児童日曜学校、ゴスペル教室、英会話教室の5つの異なる教会活動での英語使用について概説する。これらの活動では、英語の使い方は日英翻訳・通訳、バイリンガル教材、コードスイッチング、英語の賛美、英語教育などにおいて、受動的な面とともに双方向的な面もある。非母語英語を強調し英語の所有意識を奨励する「国際英語」としての英語使用は頻繁に観察されるが、同時に、新しく

会員を惹き寄せるためにネイティブスピーカー英語を戦略的に使用する場面も度々観察された。本章の後半では、主に教会Aでの伝道活動に寄与した居住外国人宣教師と短期の外国人宣教師チームの影響について検討する。教会Aの日本人会員による国際コミュニケーションのための英語使用は日本語を話せない外国人宣教師の存在により大きく増加したが、母語話者である宣教師による英語使用は、外部の人々を引き付けるのに適した母語話者の規範によって特徴付けられる。「ミッドウェスト短期宣教」の事例により宣教師と教会員がどのように交流するかという点について詳細に示す中で、母語話者である宣教師との交流においてネイティブスピーカー英語の重視の度合がかえって減少する例も提示されている。この章の最後では、伝道に関連するコミュニティ活動の変化が、外国人宣教師の関与とネイティブスピーカーの英語使用の両方が減少していったことにどのようにつながったのかという点について述べる。

第5章では、英語の使用が限られているが、主として国際交流が必要とされている国際教会である教会Bの事例を挙げる。この章では、特に長期および短期の外国人宣教師による英語使用と、海外への宣教旅行での英語の使用に焦点を当てている。宣教師による英語使用は、母語話者の規範に基づくのが一般的であったが、長期滞在の母語話者宣教師による教会Bのコミュニティへの意図的な関与と「英語の教師」という役割の拒否により、母語話者の規範を重視する度合は減少していった。これとは対照的に、短期滞在の母語話者宣教師は、彼らの英語を利用して新しいメンバーを引き付けながら、日本人学生が使用する英語に対してより特権的かつ批判的な立場をとった。教会B会員の台湾への宣教旅行の事例は、国際的な場面での英語の非母語としての使用の代表例となった。台湾人とのコミュニケーションにおいて、日本人会員は非母語話者の音韻やアクセントの理解に当初は困難を呈していたが、時間が経つにつれ慣れていった。また、日本人会員は非母語話者の相手とのコミュニケーションを促進するために、アコモデーション（適応）を必要とし、コミュニケーション方略を活用する必要があった。日本人会員の台湾英語の評価により母語話者の規範への執着が明らかとなったが、一方で台湾人学生は日本人会員にとって非母語話者による英語使用の産出モデルとしても同時に機能していた。この事例は、英語による国際コミュニケーションの相互行為、特に非母語話者を含むコミュニケーションの相互作用は、母語話者の規範への拘泥を弱め、「国際英語」の促進に役立つことを示している。

第6章では、この2つのケーススタディの両方を再検討し、英語使用の軌道を分析するために実践共同体の境界の概念を適用する。第一に、「ブローカー」としての「教会A宣教師」と「教会B宣教師」の役割、すなわちコミュニティの境界を越えて両教会と海外の教会をつなぐ役割について検討する。「教会A宣教師」が徐々に疎外されるのは外国人グループとの頻繁で密接な相互関係と、一方での教会Aの日本人会員との限定的な関わりの結果であり、彼らの地位はコミュニティの周辺へと引き出される。この変化は、教会Aでの英語使用に次の2点で影響する。第一に、母語話者の規範を特徴とする「教会A宣教師」の英語使用は周辺に押し出され、教会の実践の一部にはならなくなっていった。逆に、教会の中心での英語使用は、その頻度は大幅に減るが、非母語英語がより受け入れられるようになり、より「国際英語」としての性質が求められるようになる。「教会A宣教師」とは異なり、教会Bの外国人「教会B宣教師」はコミュニティの中心において社会的実践との関わりを強くもっており、英語の使用が内向きの関係の構築を強化し、会員が非母語話者や母語話者であるにかかわらず同等に関与している。その結果、教会Bでの英語使用は母語話者の規範をほとんど破棄し、代わりにコミュニケーションに重点を置いた英語使用を奨励している。「ミッドウェスト短期宣教」と「ウェストコースト短期宣教」の事例は軌道の重要性をさらに示しており、境界の遭遇に関わっている。両方のチームは母語話者であったが、「ミッドウェスト短期宣教」の内向きの軌道は、長期的な関係と教会文化に適応するための意図的な努力の結果であり、日本人の非母語英語変種に対するアメリカ人の極めて寛容な態度をもたらした。これとは対照的に、「ウェストコースト短期宣教」の周辺的な軌道と限定的な関与は、アメリカ人の宣教師に母語話者の規範に関して比較的変わらず重きを置くこととなった。

最後の第7章では、本研究の結論として、コミュニティ内での英語の使用を理解するためのいくつかの重要な要因を特定した。まず、コミュニティにおける英語使用に関する実践と方針は、母語話者の規範と「国際英語」の基準の両方の側面を表している。しかし、母語話者の規範を維持するかあるいは破棄するかは、主としてコミュニティ実践への参加軌道と交渉による相互関与により導かれるのである。共同体間の相互関与及び関係の深化は、母語話者の参加があっても、非母語英語使用と非母語話者の英語所有権に対する寛容な態度を奨励することとなった。日本人会員にとっては、海外における非母語話者との国際コミュニケーションは、母語話者の規範に敬意を払う態度をしばしば維持しながらも、コミュニケーション方略の使用及びアコモデーション、また非母語英語への順応を促進した。

日本における2件の国際キリスト教会という特定の状況に基づく考察である点は本研究の限界であり、本研究結果の一般化には慎重である必要がある。しかしながら、実践のコミュニティの現場における国際英語の態様の分析はこれまで例が少なく、本研究が一定の意義を有することを願うものである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（YU SIMON RON-OW ）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者		
主 査	教授	日野 信行
副 査	教授	ジェリー・ヨコタ
副 査	准教授	榎本 剛士

論文審査の結果の要旨

本論文は、共同体における実践への参加や目標の共有が言語使用や言語に対する態度に与える影響をテーマとして、日本の国際キリスト教会コミュニティにおける英語使用を分析するものである。参加者の態度と実践に関する考察は、Smith (1981)を継承した「国際英語」(EIL) (English as an International Language) の視点から行われている。本研究において、国際英語の概念は、母語話者の規範の相対化によって非母語話者のエンパワーメントをもたらすとともに、円滑な国際コミュニケーションを促進する理念として位置づけられている。

本論文は全7章から構成される。まず第1章では、この研究のテーマと目的を提示している。国際化の時代において、母語話者の枠を越えた国際英語の必要性に対する認識が高まっているが、日本においては、国際コミュニケーションの手段としての英語使用が必要となる状況は、特に教室外における現実の環境では限られているため、英語使用者の態度や信念の形成に影響を与える要因については依然として明らかでない。本研究では、2つの国際教会において、言語に対するメンバーの態度や信念を調査することによって各コミュニティ内の英語使用について考察し、同時にそれらが教会における活動や国際交流を通してどのように変化するかを分析するものである。

第2章では、先行研究に基づいた研究の理論的基礎と位置づけを概観する。まず、国際英語の概念を非母語変種を含めた英語変種の平等性を推進する考え方として捉えるとともに、非母語話者の価値観とアイデンティティを尊重する視点からの国際英語の学びについて論じている。また、考察の枠組みとしては、「実践共同体」 (Wenger, 1998)の概念を用いている。この考え方は、本論文では、社会実践における言語使用の分析、言語イデオロギーについての検討、そしてコミュニティと外部との境界に関する考察に適する枠組みとして応用されている。

第3章では、研究方法について述べている。分析の深さを重視する観点から質的分析の立場に依拠し、エスノグラフィーとしてのケーススタディの方法を採っている。データの収集は、広範な参与観察、会話、インタビューや、テキスト、レポート、記録を通じて行われ、データのコード化と分類に基づいた帰納的なデータ分析を実施している。

第4章および第5章では各ケーススタディの研究結果を示す。言語の実践と態度に関する結果を詳細に提示しており、特に英語の使用やコミュニティでの実践の状況を提示することに留意している。

第4章で取り上げた教会Aでは、礼拝・小グループ・児童日曜学校・ゴスペル教室・英会話教室の5つの異なる教会活動での英語使用について分析している。これらの活動において、非母語英語の価値を認証して英語の所有意識を奨励する「国際英語」の態度に基づいた英語使用は頻繁に観察されるが、新しく会員を惹き寄せる目的で母語話者の英語を戦略的に使用する場面もたびたび観察された。後者においては海外から来日した英語母語話者の宣教師が大きな役割を果たしている。

第5章で取り上げた教会Bでは、長期滞在の母語話者宣教師による教会Bのコミュニティへの積極的な関与に加えて「英語の教師」という役割の拒否により、母語話者の規範を重視する度合はむしろ減少していった。対照的に、短期滞在の母語話者宣教師は、母語英語を利用して新しいメンバーを引き付けながら、日本人学生が使用する英語に対してより特権的かつ批判的な立場をとった。一方、教会Bの会員の台湾への宣教旅行は、国際的な場面での非母語英語の使用の事例として意義深いものであった。台湾人とのコミュニケーションにおいて、日本人会員は非母語話者の音韻やアクセントの理解に当初は困難を呈していたが、時間が経つにつれ順応していった。また、日本人会員は非母語話者の相手とのコミュニケーションの円滑化のために、アコモデーション（適応）を必要とし、コミュニケーション方略を活用する必要があった。日本人会員の台湾英語の評価により母語話者の規範への執着も明らかとなったが、一方

で台湾人学生は日本人会員にとって非母語話者による英語使用の産出モデルとしても同時に機能していた。この事例は、英語による国際コミュニケーションの相互行為、特に非母語話者を含むコミュニケーションの経験は、母語話者の規範への拘泥を弱め、「国際英語」の認識の促進に役立つことを示している。

第6章では、この2つのケーススタディの両方を再検討し、英語使用の軌道を分析するために、実践共同体の境界の概念を適用する。第一に、「ブローカー」としての「教会A宣教師」と「教会B宣教師」の役割、すなわちコミュニティの境界を越えて両教会と海外の教会をつなぐ役割について検討する。「教会A宣教師」が徐々に疎外されるのは外国人グループとの頻繁で密接な相互関係と、一方での教会Aの日本人会員との限定的な関わりの結果であり、彼らの地位はコミュニティの周辺へと引き出される。この変化は、教会Aでの英語使用に次の2点で影響する。まず、母語話者の規範を特徴とする「教会A宣教師」の英語使用は周辺に押し出され、教会の実践の一部にはならなくなっていった。逆に、教会の中心での英語使用は、その頻度は大幅に減るが、非母語英語がより受け入れられるようになり、より「国際英語」としての性質が求められるようになる。「教会A宣教師」とは異なり、教会Bの外国人「教会B宣教師」はコミュニティの中心において社会的実践との関わりを強くもっており、英語の使用においても内向きの関係の構築を強化し、会員が非母語話者や母語話者であるにかかわらず同等に関与している。その結果、教会Bでの英語使用は母語話者の規範による拘束を大幅に緩和し、コミュニケーションに重点を置いた英語使用を奨励するものとなっている。

最後の第7章では、本研究の結論として、コミュニティ内での英語の使用を理解するためのいくつかの重要な要因を同定している。まず、コミュニティにおける英語使用に関する実践と方針は、母語話者の規範と「国際英語」の基準の両方の側面を表している。しかし、母語話者の規範を維持するかあるいは相対化するかは、主としてコミュニティ実践への参加軌道と交渉による相互関与により導かれるのである。共同体間の相互関与及び関係の深化は、母語話者の参加があっても、非母語英語使用と非母語話者の英語所有権に対する寛容な態度を奨励することとなった。日本人会員にとっては、海外における非母語話者との国際コミュニケーションは、母語話者の規範に敬意を払う態度をしばしば維持しながらも、アコモデーション、コミュニケーション方略の使用、そして非母語英語への順応を促進した。

日本における2件の国際キリスト教会という特定の状況に基づく考察である点は本研究の限界であり、本研究結果の一般化には慎重である必要がある。また、本論文は、研究におけるエスノグラファー自身の位置づけが明確でないこと、収集したデータの概要の呈示が不十分であること、「コミュニケーションの民族誌」等の社会言語学の知見の応用による分析の深化の余地を有するなど、いくつかの課題を残している。しかしながら、これらの問題点は著者自身も認識しており、また本研究のテーマの総体からみると、本論文の価値を大きく損なうものではない。また、著者は、「国際英語」自体が一種の言語イデオロギーであることを認めており、このことから、本研究には「国際英語」概念そのものに対する再帰的批判の契機も備わっているものと思われる。実践のコミュニティの現場における国際英語の態様の分析はこれまで例が少なく、本論文は学術的に顕著な意義を有するものと評価することができる。

以上のように本論文を、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。